

所沢市

地域全体で取り組み、人とのつながりを生み出す「ネオポリス買い物支援隊」

取り組みの概要

- 長く交通手段（移送）の課題があり、第2層協議体（地域ケア会議と富岡地域づくり協議会地域福祉部会との合同会議）で話し合い「買い物支援」に絞り、この取り組みを進めていくことに。
- できることをできる人がやるという意識から、民生委員はニーズ収集、地区内で手をあげた自治会をモデルに選定、介護事業所（社会福祉法人）は地域貢献として車（ドライバー）の提供と、各々が役割を分担し、買い物を支援する「ネオポリス買い物支援隊」が立ち上がった。

所沢市
 ● 人口 343,965人
 ● 高齢化率 26.1%
 (H30.1月時点)
 ● 日常生活圏域 14圏域
 ● SC配置 第1層=社協
 第2層=包括



所沢市の取り組み参考ポイント

- ① 行政・SC・関係者と住民ができることを役割分担しつつ、連携を図っている。
 - ② あるもの（会議や話し合い、物的資源）を活かすため、社会福祉法人等に積極的に声をかけようとしている。
- マニュアルp26、p30~34

担当者のひとこと

所沢市社協 佐藤 文さん・山江 芳子さん（第1層SC）一つの活動ができたから良いではなく、他の選択肢や方法がないか、冷静に分析し、伝えていく役割があると思っています。福祉分野だけでなく幅広い分野の方々と関わることで、住民の感覚や暮らしから地域づくりを見る視点が身に付きました。地域にどんな人材がいるのか、楽しい取り組みができるか、アイデアを出し合うのもSCとしての面白さだと思います。「楽しさ」「面白さ」を住民にも感じてもらえる仕掛けをしていきたいと思っています。



佐藤第1層SC：SCとして地域のキーパーソンの良さをいかに引き出すか、後押しするか意識しました。合同会議となる前の双方の会議では、生活支援について説明し、困りごとを解決していくような話し合いにしようという意識づけを図りました。

【ニーズの把握】

地域ケア会議・富岡地域づくり協議会地域福祉部会の合同会議を第2層協議体として話し合い。解決策の見えなかったニーズである移動手段に具体的に取り組んでいくことになりました。

前向きなメンバーが揃い、失敗を恐れずやりながら考えようという雰囲気が進められました。



【ワーキンググループが発足】

買い物支援プロジェクトのワーキンググループが発足し、エリア、仕組み、リスクについて検討を重ねました。

佐藤第1層SC：ワーキンググループでは、進行役（ファシリテーター）として整理や合意形成をどう図るか考えていました。行政・SCは先進地や立ち上げ準備の情報を複数提供し、イメージを膨らませてもらうようにしました。

毎回ワーキンググループ前に、行政・SC・包括・まちづくりセンターで事前打合せを行いました。



佐藤第1層SC：買い物というきっかけを作ることで、外出意欲の向上にもつながります。こうした活動の良さを、いかに周りの方々に理解してもらうのかSCとして意識しています。

【ネオポリス買い物支援隊の立ち上げ】

自然につながりが生まれ、協力者も増えています。ご近所同士の再会や新たな出会いも。買い物は介護予防に！！買い物だけが目的ではなく、人と人がつながるきっかけになりました。利用者と活動者側が参加する食事会にも発展。



【関係者への働きかけ】

社会福祉法人の車両提供の依頼や買い物先スーパーへの働きかけをし、方向性が見えてきました。あとは、やりながら決めていけばよいという考えのもと、コース下見やモニターによる実証実験を行いました。当事者とともに実証実験していくことで動線の確認など、気づくことも多くありました。

第1層・第2層の役割明確化

第1層SC：第2層SCの顔が広まるように一歩引き、サポートや相談役に回りました。
 第2層SC：ワーキンググループとともに、候補となるスーパーへ説明に。打合せ日を調整し、説明する住民のサポートをしました。

深谷市

コンビニと協働した 「地域をまわる移動販売車」

取り組みの概要

- SC（第1層・第2層）と行政が協働し、コンビニオーナーへ働きかけたことで、移動販売車を地区サロンで運行する買い物支援活動が立ち上がった。
- 移動販売車で買い物をした利用者からは、自分で見て買い物をする喜びの声が寄せられている。

深谷市
 ●人口 144,375人
 ●高齢化率 27.4%
 (H30.1月時点)
 ●日常生活圏域 12圏域
 ●SC配置 第1層=社協
 第2層=包括



荻原第1層SC：もともとの目的は交流スペース確保でしたが、移動販売車を発見できたのは、地域をまわり、コンビニに足しげく通った結果です。疑問に思ったこと、気づいたことを聞いてみるのが大切だと感じました。

【移動販売車との出会い】

コンビニのイートインスペースを地域の集いの場にできないかと思い、第2層SCとも手分けして、市内のコンビニをまわっていました。そこで出会ったのが1台の移動販売車でした。



【関係者への働きかけ】

市担当者や第1層SCでコンビニオーナーやコンビニ運営本部関係者と打合せを行いました。第1層協議体でも話し合い、協議体メンバーが運営に携わっている地区サロンでモデル的に運行することに。

荻原第1層SC：コンビニオーナーは移動販売車の活用に悩んでいたため、SCとして地域のニーズや活用方法のアイデアを提案しました。



深谷市の取り組み参考ポイント



地域貢献に積極的な民間企業も多くありますが、どのように取り組めば良いかわからないことも。地域住民の声を代弁し、できることを探りながら提案していくことが、打開策発見の糸口になる。
 マニュアルp34

担当者のひとこと

深谷市社協 荻原 祐輔さん（第1層SC）福祉ではない分野の方々に提案や説明する際に、専門用語や我々の当たり前で伝えないように工夫しました。新たなことに取り組むのはハードルが高いイメージがありますが、こちらが熱意をもっていけば、仲間が増え、活動が良い方向に波及していくと実感しました。地域の理解を得ることや交渉事には苦労しましたが、今後も地域の潜在的ニーズを解決する新たな取り組みを推進していきたいと思えます。



【移動販売でつながりづくり】

現在は、市内を不定期に回っています。移動販売車での買い物を通じて、地域のつながり構築や喜び・生きがい創出につながっています。

荻原第1層SC：当初の目的だった、イートインスペースの活用にも取り組み、小学生の創作物を展示する「ふっかちゃんふれあいギャラリー」も市内コンビニで展開することができました。



【モデル運行】

方向性が決まり、モデル運行されました。サロン参加者に好評！！

荻原第1層SC：人が集まる場所は、地域住民の声が集まる場でもあります。地域ごとのニーズを聞き取るチャンスだと思っています。



戸田市

医療法人との居場所づくり 「地域サロンふくふく」

取り組みの概要

- 医療法人翔誠会ふくだ内科の旧第2待合室（現健康カフェ）を活用し、NPO法人グリーンガーディアンズが地域サロンふくふくを開催している。
- 地域サロンふくふくは、「大人の寺子屋」として、脳トレ（読み・書き・計算・歌や折り紙・工作・レクリエーション）などを行っている。また、季節ごとのイベントや環境問題、医療・介護・健康の講座も開催している。

戸田市
 ●人口 138,738人
 ●高齢化率 16.0%
 (H30.1月時点)
 ●日常生活圏域 1圏域
 ●SC配置 第1層=社協

戸田市の取り組み参考ポイント



- ① 包括や町会・自治会、民生委員・児童委員などの関係機関への相談・報告・協力依頼など活動者だけでは難しい部分をSCが支援。
 - ② それぞれの団体の目的や得意・不得意を考慮しながら、お互いが納得できる話し合いを行っている。
- マニュアルp30~34

担当者のひとこと

戸田市社協 飯田 直子さん（第1層SC） マッチングに当たっては、双方の想いが合致するかどうかが一番大切なので、少しでもズレがある場合には無理に押し進めることはしていません。現在、他の病院や社会福祉法人からも空きスペースを活用したいという相談があります。それぞれの「やりたいこと」を大切にしつつ、地域のために活用できるように、SCとして情報収集やマッチングに取り組んでいます。



ふくだ内科：住民の未病や介護予防の観点で、空いている時間にスペースを地域のために活用したい！何かいい方法はありますか？



飯田第1層SC：「新たな集いの場としての活用ができるかも！」と思い、ふくだ内科を訪問し、希望や提供できる曜日や時間帯など詳細を確認しました。

【ニーズと資源のマッチング】

ちょうど、同じ地区でサロンをやりたいけど場所がないという声がありました。すでに他の地区で「大人の寺子屋」を運営しているグリーンガーディアンズでした。ふくだ内科の趣旨にも沿うので、サロンの担い手としてグリーンガーディアンズを紹介しました。同時期に、包括にサロン協力者の募集や利用者周知への協力を依頼しました。



まずは、お互いの想い・やりたいことを率直に伝え合うことから始めました。不安を残したまま話が進まないよう、打合せ後にはSCがそれぞれに感想を聞き、次の打合せでSCから提案するなどしました。

【初顔合わせ】

ふくだ内科とグリーンガーディアンズ、SCで打合せを行いました（活動開始までに3回程度実施）。
 「目的の共有」と「お互いの意思確認」
 ①開催日 ②開催時間 ③室内備品の費用
 ④駐車場、駐輪場の借用 ⑤必要備品
 ⑥保険 ⑦鍵の取扱い ⑧活動費用 など



地域サロンふくふく

【サロンの開催】

毎回、脳トレは大盛り上がり。参加者も口コミで増え、楽しい時間を過ごしています。他の地区の「大人の寺子屋」参加者が、サロンふくふくではボランティアとして協力してくれています。サロンが開始してからは、イベント講座でふくだ内科の管理栄養士が講師を務めることも！



飯田第1層SC：町会長と民生委員・児童委員協議会会長にサロン立ち上げの報告と、周知の協力を依頼しました。町会には回覧でチラシを配付いただきました。回覧を見た家族に勧められて参加している方もいます。



【ふくだ内科スタッフへのサロン説明会】

ふくだ内科の医師・看護師・医療事務職員等にサロンの内容を説明し、周知の協力をお願いしました。説明会を経て、ふくだ内科のホームページへの情報掲載や、受付でのチラシ配置に協力いただきました。



草加市

多様な活動者とのつながりを活かした取り組み

取り組みの概要

- SCの役割である「つなくプロ」を実践するために、高齢福祉分野だけでなくリノベーションや子育て支援の活動者や、障害者支援事業所など他分野とのつながりを積極的に作っている。
- 地域の多様な活動者とながらすることで、新たな関係性も生まれ、SCとして豊富な情報量をもとに、人と人、人と場をつなぎ、新たな活動をつくっている。

草加市
 ●人口 247,991人
 ●高齢化率 24.2%
 (H30.1月時点)
 ●日常生活圏域 8圏域
 ●SC配置 第1層=社協
 第2層=社協

草加市の取り組み参考ポイント



- ① SCが所属する組織はもちろん、行政の他部署や関係者、つながりができた地域活動者などと顔の見える関係性をつくり、SCの役割を理解してもらうと様々な情報が入ってくるようになる。
- ② SCの活動範囲を限定する必要はなく、多様な分野でのネットワークづくりがつながりの基盤となる。

マニュアルp28・p33~34

担当者のひとこと

草加市社協 白河部 りつ子さん(第1層SC) SCの役割はつなくこと。自分が地域のことを知らないで紹介はできないですし、自分の目で見ていないと自分の言葉で伝えることができません相手に伝わりにくいと感じています。実際に行ってみると新しい情報やつながりを発見することもあります。これから活動したい方からの相談では、SCが話を聞くことで、ご自身の思いが整理されていくように感じます。場所などの情報提供や周知協力などSCができるサポートを伝えることで、活動に向けたイメージが具体化できるようです。



【地域の声を聞き、日々のネットワークづくりに】

【SCが聞いた地域で活動しているシニアたちの悩み】

- 人が集まらない
- 若い人が来ない
- 担い手がいない(後継者がいない)

高齢者分野だけで考えるのは限界?



そんな時、子育て中のママたちから、「私たちが何をしたいか、何を求めているのか、私たちの活動を見に来て」と声をかけていただいた。



実際に見に行くと、お互いの顔が見えるので垣根も低くなり、活動している人たちが何を求めているのか、何に困っているのか情報が得やすくなりました。

求めているものが違う活動を無理につなげるよりも、SCとして、ニーズがどこにあるか情報を集めて、引き出しとしてストックし、目的が合致する活動をつなげられるようにしています。

【情報収集、周知の工夫】

- 公民館などの情報ラックや掲示版でどのような活動があるかチェック。
- 気になる活動があれば、声をかけてみる。どんな活動をしているのか聞いてみる。
- 時間を見つけて、実際に足を運び活動を見る。
- 社協のFacebookを活用し、SCレポートにて地域の活動を紹介。
→シェアしてくれると広がっていく。
- 活動者を自治会に紹介したり、社協が行う地域懇談会など地域の集まりに誘う。
→活動者と地域がつながると、シニア層の社会参加の場が増える。

【ネットワークを活かした、多様な活動創出】

白河部第1層SC：包括から、認知症サポーターが活躍できる場がないという悩みを聞きました。そこで、包括と社協CSWとSCで協力しフォローアップ講座を開催。夜に開催した講座でSCから地域の現状などをお話したり、認知症介護者の話を聞くワークショップなどを5~6回行い、グループ化に結びつきました。



認知症サポーター養成講座修了者で認知症啓発のためのグループ「草加 柿とロバの会」を発足！認知症に関する映画上映会や寸劇にもチャレンジします。



地域の居場所「さかえーる」での創作カフェ。障害者就労支援事業所「キャリカ」が運営し、障害者がお茶やお菓子で来場者をもてなしています。

「キャリカ」が障害者の就労移行へのステップアップの場として、地域とつながりたい、という情報を第2層SCがキャッチ。第2層と第1層が協力して「キャリカ」と話し合いを重ねる中で、社協が借り受けている民家「さかえーる」で創作カフェを立ち上げることになりました。カフェには高齢者はもちろん、地域の様々な人が訪れ、新たな居場所になっています。

鳩山町

歩いて通える自宅開放型の 住民主体サロン

取り組みの概要

- 町内でボランティア活動をしている方が自宅を開放し、週に1回おしゃべりを楽しむサロン「鳩の部屋」を開催している。
- 歩いていける場所に集えることで、遠くのサロンに行けなかった人も参加できるようになった。

鳩山町
 ● 人口 14,000人
 ● 高齢化率 41.1%
 (H30.1月時点)
 ● 日常生活圏域 1圏域
 ● SC配置 第1層=社協

【自宅開放の希望】

町内でボランティア活動をしているTさんご夫婦。70代半ばになったのを機に、今後自分たちが家から出かけることが難しくなってきたときに、家に集まってくれる人たちがいるといいなと考え、自宅サロンを始めたいという思いになりました。



社協ボランティアコーディネーター：ボランティア連絡会にて、SCの「鳩山町の地域性を考えると歩いて行けるところに集える場所があるとよい」という話を聞いたTさんご夫婦が、自分たちの自宅を開放したいと提案してくれました。



山本第1層SC：「誰かの出かける場所の一つ」「ご近所で仲間とつながれる」ことを大切にしています。参加者が来るのが大変だろうという運営者の意向から、7～8月・12～3月はお休みにしています。



【鳩の部屋オープン】

ボランティアコーディネーターとSCが、ご近所で対象となりそうな方への周知を行いました。また、ボランティア保険への加入をすすめ、参加費50円で保険代にあてることにしました。



オープンの目印となる看板は町内のイラストレーターさんがつくってくれました。



鳩山町の取り組み参考ポイント



- ① SCとして地域の関係者の集まりなどに参加し、活動に興味をもってもらうよう、わかりやすい言葉で地域づくりの説明をしている。
- ② 自宅というプライベート空間の提供であるため、主催者の気持ちや都合を第一優先で支援している。

マニュアルp31～32

担当者のひとこと

鳩山町社協 山本 京子さん(第1層SC) 自宅ということもあり、どこまでSCとして踏み込むべきか悩むこともあります。サロン主催者の思いや経験に合わせて関わりの度合いを変えたり、サロンの様子がわかるように月に1回くらいは顔は出すようになっています。他にも自宅開放したいという方に「鳩の部屋」を紹介し、一緒に参加してイメージを掴んでいただいています。



【Tさんご夫婦の気持ちを尊重】

「毎回内容を決めてしまうと続けることが負担になってしまうので、内容は決めないでやりたい」というTさんご夫婦の意思を尊重しています。来ている人たちで「今度手芸やりたいね」となれば、次に手芸をする…というように過ごされています。利用者からも外出の機会ができた喜びの声が聞かれます。

山本第1層SC：SCが地域ケア会議や地域の集まりに出席して、サロンなど地域資源の情報提供をしています。そのなかで「鳩の部屋」を紹介し、ケアマネジャーにも知ってもらったことで、ケアマネジャーが紹介してくれることもあります。



【広報誌への掲載】
 自宅なので大々的な周知はしませんが、町の広報担当から特集コーナーの取材先サロンの照会があり、SCから「鳩の部屋」を紹介し、広報誌に掲載されました。

寄居町

常設型居場所づくりから、 みんなが主役の活動へ

取り組みの概要

- 県アクティブシニア社会参加支援事業を活用し、民家を借上げて居場所づくりをし、ボランティア中心で運営。SCがサポートしている。
- 火曜日はお茶飲みサロン、木曜日は健康マージャン教室としてサロンを開催。
- 集うことをきっかけに、交友関係が広がったり、“支えられる側”だった人も活躍できる場になっている。

寄居町
 ● 人口 34,079人
 ● 高齢化率 31.1%
 (H30.1月時点)
 ● 日常生活圏域 2圏域
 ● SC配置 第1層=社協
 第2層=社協



寄居町の取り組み参考ポイント

- ① SCが頻繁に顔を出すことで信頼関係ができ、住民の声を聞く場にもなっている。
- ② 趣味活講座とのタイアップや学校とのコラボレーションなどにより、住民の活動が多様に広がっている。

マニュアルp35

担当者のひとこと

寄居町社協 山崎 祐子さん(第1層SC)、鹿嶋 裕子さん・大久保 愛さん(第2層SC)
 サロンボランティアで定期的に運営会議を行っています。SCとして運営に関わることはせず、必要な時のバックアップにとどめ、ボランティアの主体性を大事にしています。これからも自分自身が楽しみながら活動していただく場として続いていくといいなと思います。ゆくゆくは多世代も参加してもらえるよう工夫していきたいです。



民家を居場所として活用

【サロン開設のきっかけ】

元々、地域支えあいの会連絡会という住民組織があり、その中から立ち上げ運営委員を選出して、サロンでの活動内容やボランティア募集方法など検討を重ねました。



見学会で会場の雰囲気を体感(オープン前)

【新たな活動者を増やそう】

社協事業「楽しい趣味活」体験講座

町内で活躍できる人材育成を目的に、複数の体験活動講座を行い、参加者には体験で得た技術や経験を活かして、町内で活動していただくというものです。

常設サロンでも体験講座参加者が発表する機会をつくっています。

<講座メニュー例>

- ・ギター演奏
- ・チンドン屋
- ・手芸
- ・そば打ち体験
- ・木工体験
- ・子ども食堂体験
- ・ミニ農業体験
- ・パルーン製作体験

【サロンボランティア】

サロンボランティアには、運営委員から手を上げてくれた人に加え、回覧板や口コミで新たな顔ぶれが集まってくれ、SCが顔つなぎをしました。立ち上げ運営委員とサロンボランティアの初顔合わせ・引継ぎも兼ねて、皆で民家の大掃除を行いました。サロンボランティアの中には“支えられる側”だった方も参加してくれています。

【みんなが主役の活動へ】

第2層SC：福祉サービスを利用している方も一緒に健康マージャンを楽しんでいます。事前にSCに相談があったので、SCからサロンボランティアに必要な情報提供を行い、ボランティアが参加者を見守りながら活動しています。



サロンボランティアで仲良くなった方々が町の体操ボランティア養成講座に通い、いきいき百歳体操をやりたいと提案してくれました。SCからのアドバイスで活動が始まり、徐々に参加者が増えました。現在、20名程度の参加者が週1回活動しています。



【できることを大切に】

ボランティアも参加者も「できることは自分でやろう」を促すために、コーヒーマシンをセルフ方式にしてみました。

第2層SC：小学校から社協に、「児童と一緒に花を植えてくれるボランティアはいませんか」と相談がありました。サロンの場所が小学校の目の前なので、SCが健康マージャン教室で声をかけたところ、ボランティア、参加者にかかわらず5~7人の方が協力してくれました。今後も続いていくといいなと思っています。



三芳町

話し合う会から生まれたみんなの居場所 「藤久保1区支え合い活動ができる場所なかよし」

取り組みの概要

- 支え合い活動を話し合う会（住民ワークショップ）を通して、住民同士で考え、話し合うことで生まれた地域の居場所。
- 「決まった人が来る場所」ではなく、「初めての人も気軽に来られる場所」を作った。
- 近所で支え合い活動ができる地域を目指すため「地域に顔見知り」をつくり、「困った事を相談できる」関係性をつくっている。
- 決められたプログラムはなく、参加者が思い思いに過ごしている。
- みんなが役割をもつことを大事にし、準備から片づけまで協力して行う。

三芳町
 ● 人口 38,404人
 ● 高齢化率 27.4%
 (H30.1月時点)
 ● 日常生活圏域 1圏域
 ● SC配置 第1層=社協

三芳町の取り組み参考ポイント

- ①話し合いや居場所をSCにとっての情報源やネットワーク構築の場として活用している。
 - ②地域の自主性や互助力を信じ、高めていけるようなサポートをしている。
- マニュアルp42~43、p47~48、p52~53



担当者のひとこと

三芳町社協 関口 和宏さん（第1層SC） SCの伝えたいことを理解して、自然と動いてくれる人が増えてきています。藤久保1区なかよしのような場が増えることで、自分たちも地域への声かけがしやすくなっていると実感しています。
 行政とも一緒に動き、町全体の事業として取り組んでいくことで、行政ではヨコ連携の大切さ、住民では協働の大切さに気付いてくれる人も多くなってきました。



【藤久保1区の支え合い活動を話し合う会】

第1回	現在や将来に向けた生活不安を出し合い、地域にあったら良い支え合い活動について話し合った。
第2回	ニーズが多かった居場所にテーマを絞り、どんな居場所が良いか、自分達でできることを出し合った。
第3回	具体的にどのような居場所が良いか話し合った。
第4回	「いつ来ても、何をしても、新しい人も気軽に来れる居場所」や「顔見知りができ、相談できる場所」といったキーコンセプトを話し合った。



関口第1層SC：「参加者の状況や地域の情報をこの場所に寄せて欲しい」と一人ひとりが地域の声をSCに伝えるサポーターだとアナウンスしています。それだけでなく「いかに自分たちで動いてもらうか!!」のアプローチとして、地域の「困った」を伝えるようにしています。

【関係者への報告】

話し合う会の結果は自治会などにもきちんと報告しました。報告時には、地域の方が協力してくれることもありました。



【今後に向けて】

今後は「新しい人でも気軽に来れる居場所」「支え合い活動ができる場所」というコンセプトをいかに浸透させていくのが課題です。周知の工夫をみんなで話し合っていきます。

関口第1層SC：全体の「ささえあいみよし(第1層協議体)」にも、藤久保1区なかよしの毎月の様子やエピソードを報告しています。周知の課題など、活動のサポートを町全体で取り組んでいければと思っています。



基本的に毎月顔を出すようにしていますが、運営に口出ししないようにします。ただし、地域で支え合いのネットワークを作るため、参加者や世話人とのコミュニケーションはしっかりとります!!



【居場所の立ち上げ】

場所は集会所に、必要なものは各々持ち寄ることにしました。おしゃべりでも、自分の好きなことをしても良い、誰でも参加できる居場所「藤久保1区なかよし」が立ち上がりました(毎月第3火曜日)。

上尾市

顔の見える関係ができる支え合い活動 「社協原市支部 ちいさなたすけあい」

取り組みの概要

- 原市支部内の事務区ごとに、無理なく・お互いさまの関係で・できる範囲での支え合い活動に取り組んでいる。
- 現在は 11 事務区中 7 事務区で活動展開中。今後全事務区での展開を目指し、第 2 層 SC が社協支部や区長をサポートしている。

上尾市
 ● 人口 228,480人
 ● 高齢化率 26.4%
 (H30.1月時点)
 ● 日常生活圏域 12圏域
 ● SC配置 第1層=社協
 第2層=社協



上尾市の取り組み参考ポイント

- ① 事務区ごとの住民の主体的な活動を、その特徴を踏まえてサポートしている。
 - ② 第 2 層 SC として黒子に徹しつつ、住民のモチベーションを高めたり、事務負担軽減のアドバイスを行ったりしている。
- マニュアル p42~44

担当者のひとこと

上尾市社協 荒井 和明さん(第 2 層 SC) SC として、事務区ごとの流儀に合わせていく難しさを感じることはありますが、各事務区が話し合いを重ねてきた結果が形となった時は、すごくうれしい気持ちになります。小地域での取り組みだからこそ、区長さんや支部の調整役の方々との連携を密にし、理解を促していくことが大切と感じています。事務区ごとの助け合いの強みは、隣近所だからこそお互いの暮らしに自然と首をつっこんでやってみようよという気持ちになれることだと思います。



荒井第 2 層 SC：全地区での活動展開を見据えた際に、立ち上げ時のサポートの必要性を感じました。そこで、市社協が予算を確保し、支部社協による活動立ち上げの助成金をつくったり、立ち上げ計画の雛形を支部の関係者とともに作りました。

【SCによるきっかけづくり】

ある自治区で助け合い活動が自然と始まっていました。SC がそうした小地域活動の重要性を伝えたところ、平成 28 年頃に支部長自ら、小地域での支え合いの必要性や全事務区での「地域のちいさなたすけあい」活動展開を地域へ訴えてくれました。

荒井第 2 層 SC：全体講習会を企画し、SC として人材育成の話をしたり、先進地団体を講師として呼ぶなど黒子としてサポートしました。

住民主体活動へ導いていくため、肯定的な発言をするなど機運を高めることに徹しました。



【住民主体の活動へ】

平成 28~30 年度の 3 年間をかけて、懇談会や区長会での話し合いを重ねていき、活動創出までの合意形成を図っていききました。各事務区での二ズ聞き取りや実証実験は区長が積極的に動いてくれました。

【今後に向けて】
 既に活動している事務区では、消耗品や資材の保管場所など具体的な課題が明らかになりました。今後立ち上げる事務区には、そうした課題を情報提供し、全地区での活動展開へつなげていきます。



荒井第 2 層 SC：区長さんとは積極的にコミュニケーションをとり、情報共有しています。そして、皆さんの活動を「とにかく褒めます!!」



【活動の展開】

活動開始後は、座談会を開催し、事務区同士の情報交換や先進区からの事例報告をしています。各区が刺激し合い、良い意味での競争になっています。

活動を始めるにあたり、情報提供やアドバイスをを行いました。例えば、助成金の報告書を簡素化し、事務量を軽減できるように提案したり、活動のサポートが必要と感じれば、総合事業サービス B 移行の提案をし、市との橋渡しも行いました。